

ザ・ビックラン 神奈川

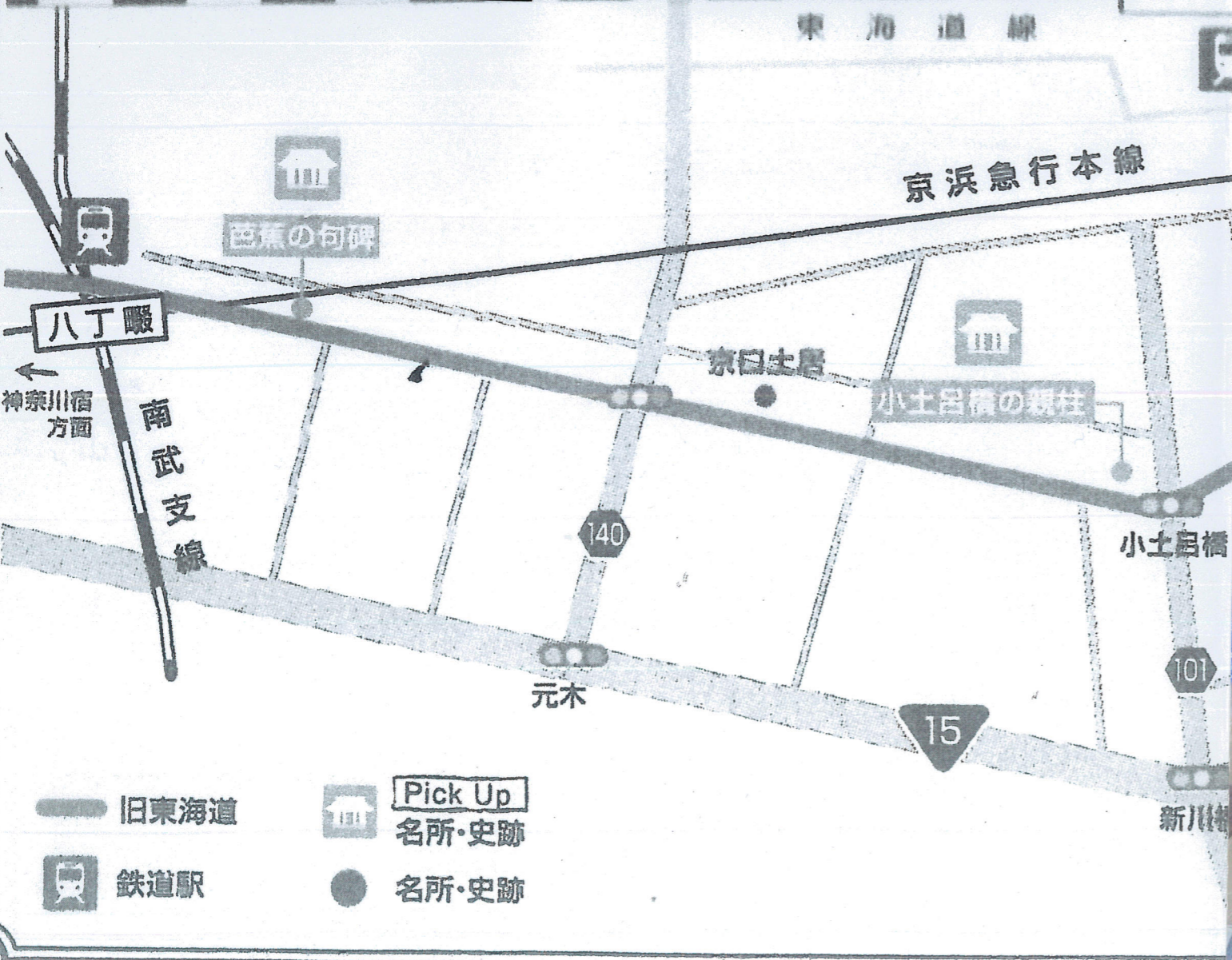
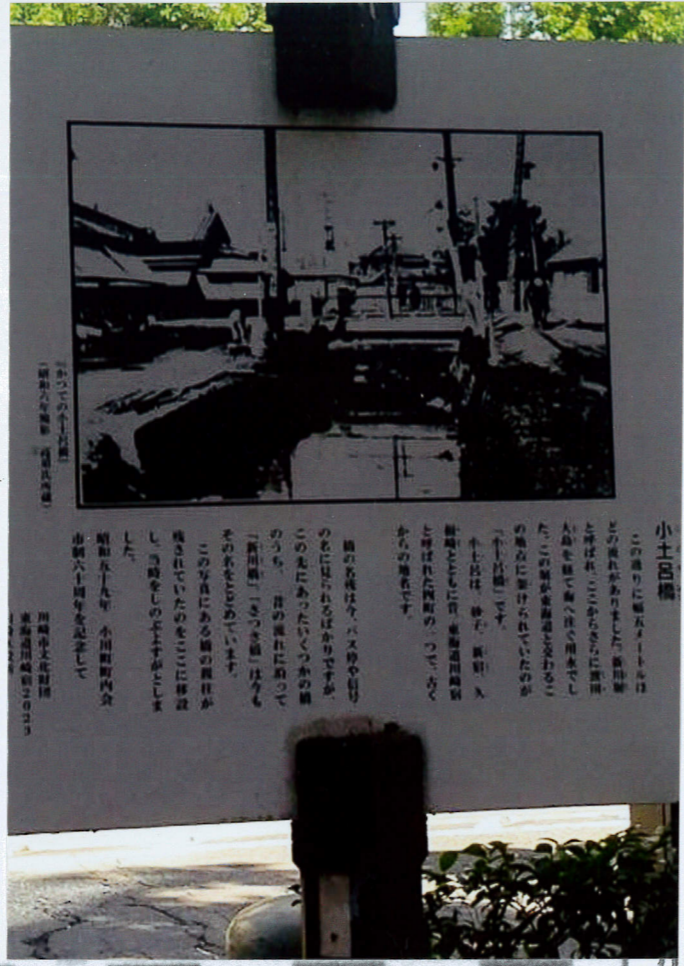
完走記録報告書

作成 2018年 11月23日

エントリー番号	10
氏名	丹一也
実走期間	2日
全走行距離	169.4
特記事項	

月日	走行ルート	走行距離
10/21	<p>川崎宿</p> <p>自宅 → 万年屋跡 → 田中屋本陣跡 (40.8km) (41.2)</p> <p>↳ 東海道つりどき宿 → 小土呂橋の親柱 交流館 (41.4) (42.1)</p> <p>↳ 芭蕉の句石碑 (42.9)</p>	
	<p>神奈川宿</p> <p>↳ 長延寺・見附跡 → 高札場の復元 (52.9) (54.4)</p> <p>↳ 神奈川台場跡 → 関門の石碑 (56.0) (57.8)</p>	
	<p>保土谷宿</p> <p>↳ 旧帷子橋跡 → 御所台の井戸 (60.8) (63.5)</p> <p>↳ 本陣跡 → 旅籠本金子屋跡 (64.0) (64.2)</p> <p>↳ 権太坂 (65.7)</p>	
	<p>戸塚宿</p> <p>↳ 日本人によるハム作りはじまり地 → 五太夫橋 (73.1) (73.3)</p> <p>↳ 江戸方見附跡 → 大橋 (73.6) (74.2)</p> <p>↳ 澤邊屋本陣跡 (76.7)</p>	
	<p>藤沢宿</p> <p>↳ 遊行寺 → 遊行寺橋 → 関次 敵御方供養塔 (大金屋橋) 商店 (87.4) (87.9) (90.0)</p> <p>↳ 白旗神社 → 伝義経首洗い井戸 (90.6) (91.1)</p> <p>↳ 平塚馬尺</p>	105.4

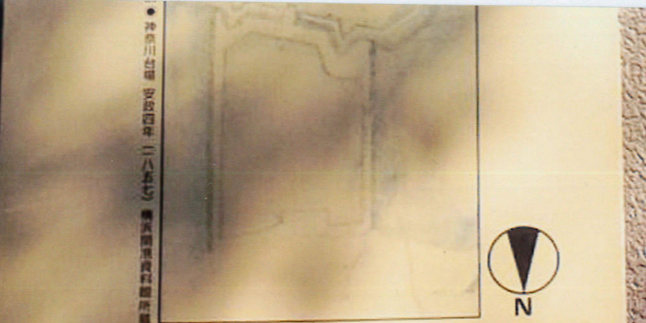
月日	走行ルート	走行距離
10/29	<p>平塚宿</p> <p>お菊塚 → 江戸見附跡 → 腸本陣跡 (0) (0.4) (0.9)</p> <p>↳ 高札場跡 → お初の墓 (1.0) (1.9)</p>	
	<p>大磯宿</p> <p>↳ 化粧井戸 → 嶋立庵 (4.4) (6.6)</p> <p>↳ 旧島崎藤村邸 (7.1)</p>	
	<p>小田原宿</p> <p>↳ 江戸見附跡 → 里塚 (22.0)</p> <p>↳ 小田原城蓮上院土塁 → 小田原城 (22.3) (24.2)</p> <p>↳ 清閑亭 → 松永記念館 → 小田原用水取水口 (25.6) (27.0) (27.5)</p>	
	<p>箱根宿</p> <p>↳ 箱根の石置 → お玉ヶ池 → ケンパールの石碑 (40.6) (41.2) (42.5)</p> <p>↳ 箱根関所 (44.7)</p> <p>↳ 小田原馬尺</p>	64.0





●神奈川台の関門跡

ここよりやや西寄りに神奈川台の関門があった。開港後外国人が何人も殺傷され、イギリス総領事オールコックを始めとする各国の領事たちは幕府を激しく非難した。幕府は、安政六年（一八五九）横浜周辺の上り地点に関門や番所を設け、警備体制を強化した。この時、神奈川宿の東西にも関門が作られた。そのうち西側の関門が、神奈川台の関門である。明治四年（一八七二）に他の関門・番所とともに廃止された。



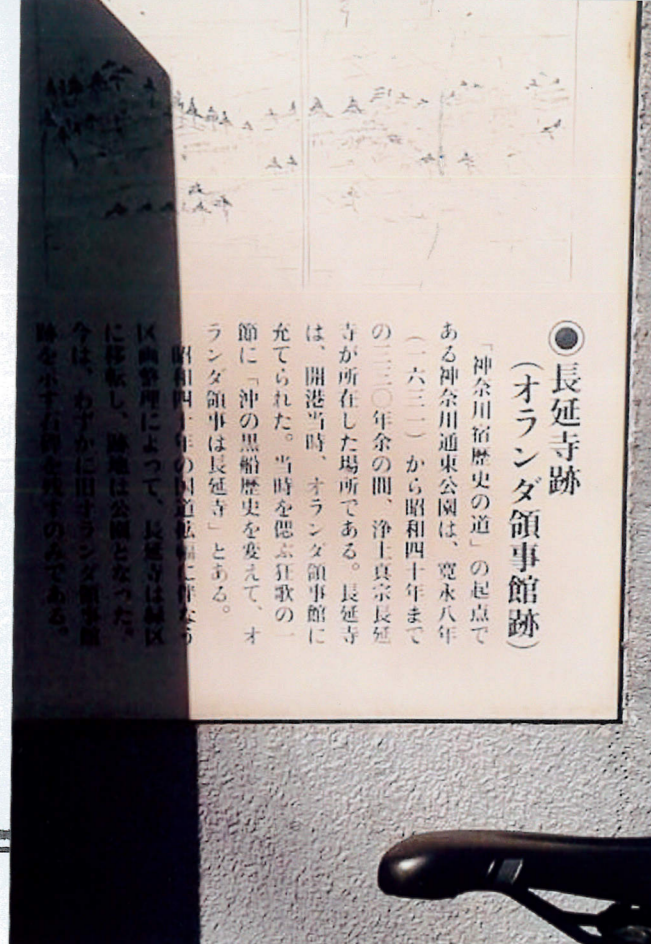
●神奈川台場跡

安政六年（一八五九年）五月、幕府は伊豫松山藩に命じ、勝海舟の設計で海防砲台を構築した。当時の台場は総面積二万六千余平方メートル（約八千坪）の海に突き出した扇形で、約七万両の費用と工期約一年を要し、萬延元年（一八六〇年）六月竣工した。明治三十二年二月廃止されるまで礼砲用として使われたが、大正十年頃から埋め立てられ、現在では石垣の一部を残すのみとなった。



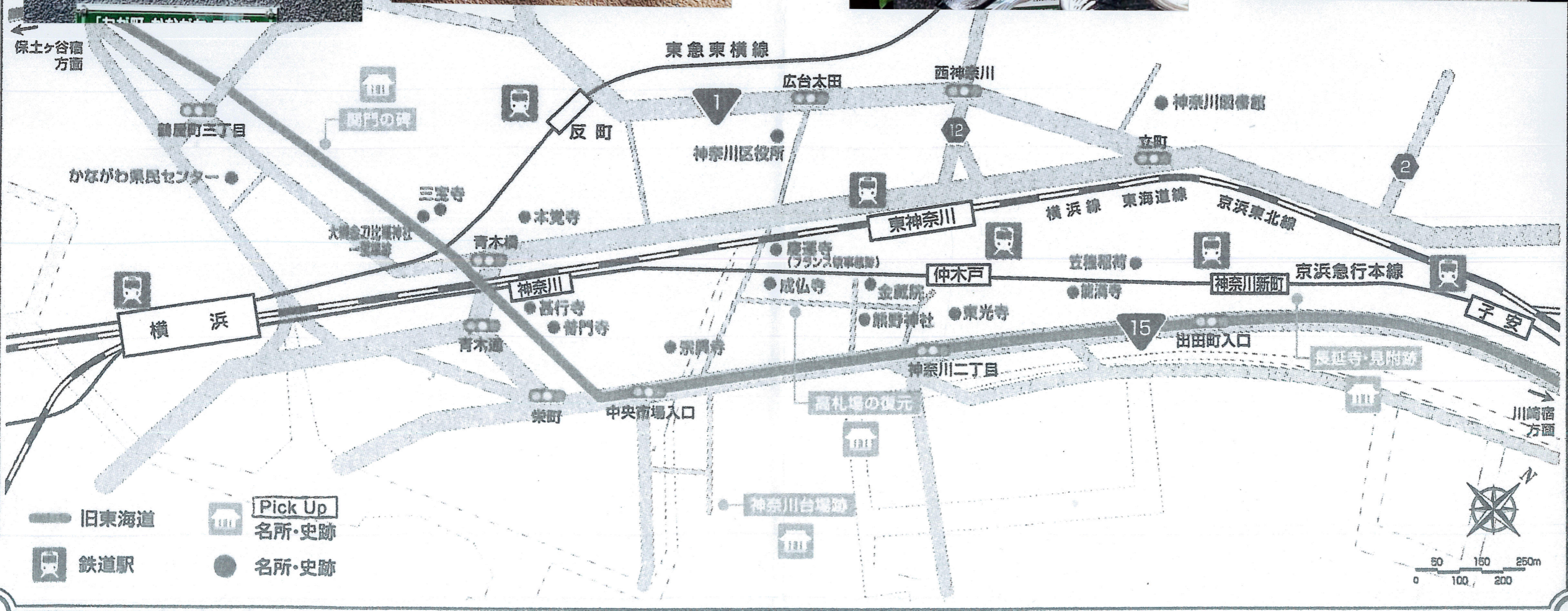
●高札場

高札場は、幕府の法度や掟などを庶民に徹底させるために設けられた施設です。宿場の施設としては重要なもので、人が明治に入り情報伝達の手段が整うにつれて、やがて姿を消しました。かつて神奈川宿の高札場は、現在の神奈川警察署西側付近にありました。その規模は、間口約5m、高さ3.5m、奥行1.5mと大きなものでした。この高札場は、資料をもとに復元したものです。



●長延寺跡 (オランダ領事館跡)

「神奈川宿歴史の道」の起点である神奈川通東公園は、寛永八年（一六三二）から昭和四十年までの二〇八年余の間、浄土真宗長延寺が所在した場所である。長延寺は、開港当時、オランダ領事館に充てられた。当時を偲ぶ狂歌の一節に「沖の黒船歴史を変えて、オランダ領事は長延寺」とある。昭和四十年の国道拡幅に伴う工事によって、長延寺は跡地に移され、跡地は公園となった。今は、沖の黒船にちなんで「沖の黒船歴史の道」として、長延寺跡を案内している。



旧帷子橋跡

慶長6年(1601年)正月、東海道が帷子川を渡る地点に架けられていた帷子橋は、除害に揚がれたり、歌や俳句に詠まれるなど、保土ヶ谷宿を代表する風景として知られていました。中でも初代広重の『東海道五十三次之内 保土ヶ谷』は特に有名です。

大橋や新町橋なども呼ばれた帷子橋について、『新編武蔵風土記稿』の帷子町・保土ヶ谷宿のうち、帷子橋、帷子川二架又板橋二子高欄ツナリ、長十五間、幅三間、御普請所ナリ」という記載がみられます。

帷子川の流路がそれまでの相模川天王町駅南側から北側に付け替えられたのに伴い、帷子橋の位置も変わりました。かつての帷子橋の跡地は、現在の天王町駅前公園の一角にあたります。



横浜市教育局

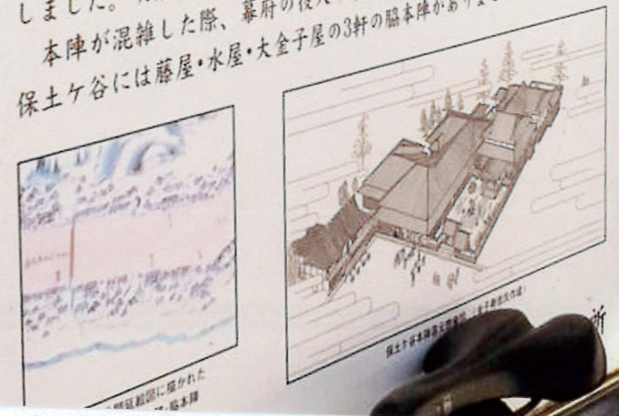


本陣跡

慶長6年(1601年)正月、東海道の伝馬制度を定めた徳川家康より「伝馬本陣」が「ほかや」(保土ヶ谷町)あてに出されたことにより、保土ヶ谷宿が成立しました。

東海道を往来する幕府の役人や参勤交代の大名は、宿場に設置された本陣に宿泊しました。保土ヶ谷宿の本陣は、小田原北条氏の家臣河部重頼の子孫といわれる河部家が代々つとめています。同家は、関原・名主を兼ねるなど、保土ヶ谷宿における最も有力な家で、安政6年(1859年)に横浜が開港する際、当時の当主清兵衛悦南が総年寄に任ぜられ、初期の横浜町政に尽くしました。明治3年(1870年)に軽部姓に改称し、現在に至っています。

本陣が混雑した際、幕府の役人や参勤交代の大名は隣本陣に宿泊しました。保土ヶ谷には藤屋・水屋・大金子屋の3軒の隣本陣がありました。



歴史の道 外籠屋(本金子屋)跡

伝・明治



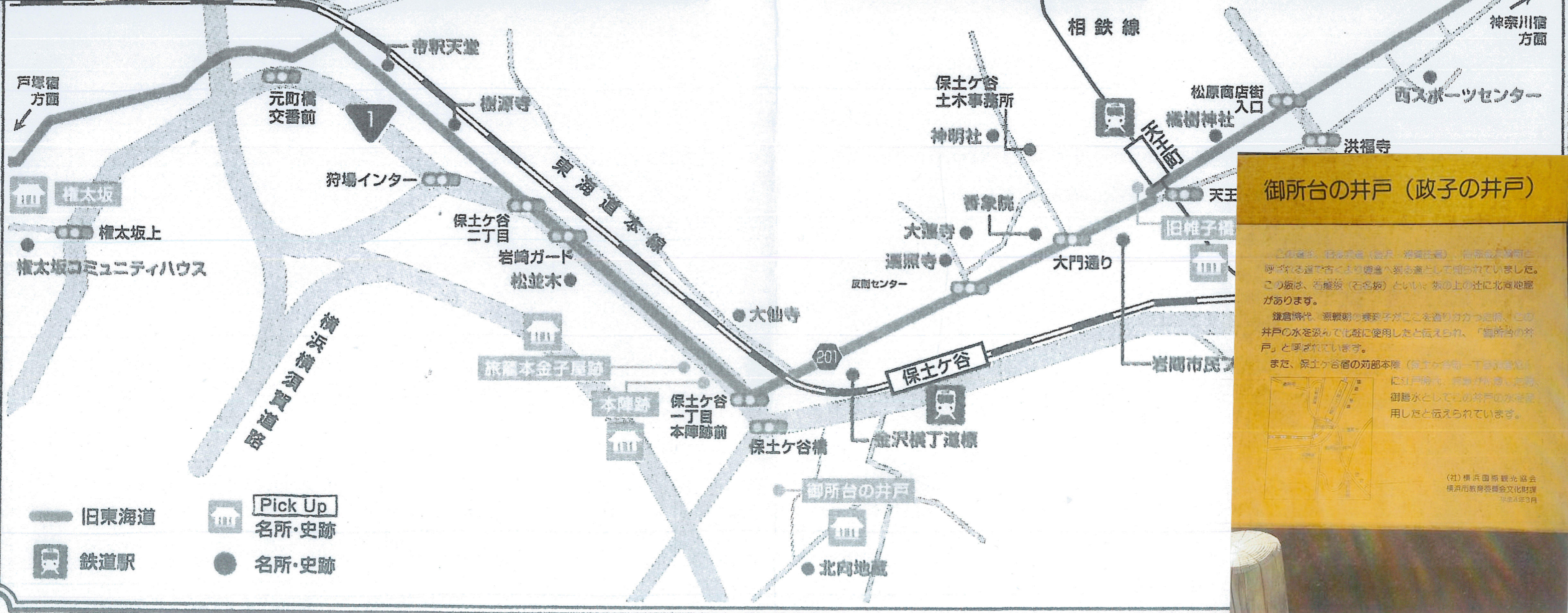
権太坂

平成十五年十一月四日 登録

この辺りは、権太坂と呼ばれる東海道を江戸から西へ向かう旅人がはじめて経験するきつい登り坂でした。

日本橋から四番目の宿場であった保土ヶ谷宿まではほぼ江戸内湾沿いの平坦地でしたが、宿の西にある元町橋を渡ったあたりより、長く続く険しい登り坂となります。

『新編武蔵風土記稿』に、名前の由来は、道はたの老翁の農民に「新編武蔵風土記稿」に、耳の遠いこの老人は自分の名を聞かされたかと思ひ、「権太」と答えたため、とあります。また、坂の上から目の下に見える神奈川の海は大変美しく、とあり、旅人にとっては印象深い場所になり、浮世絵などにも描かれる保土ヶ谷宿の名所ともなりました。



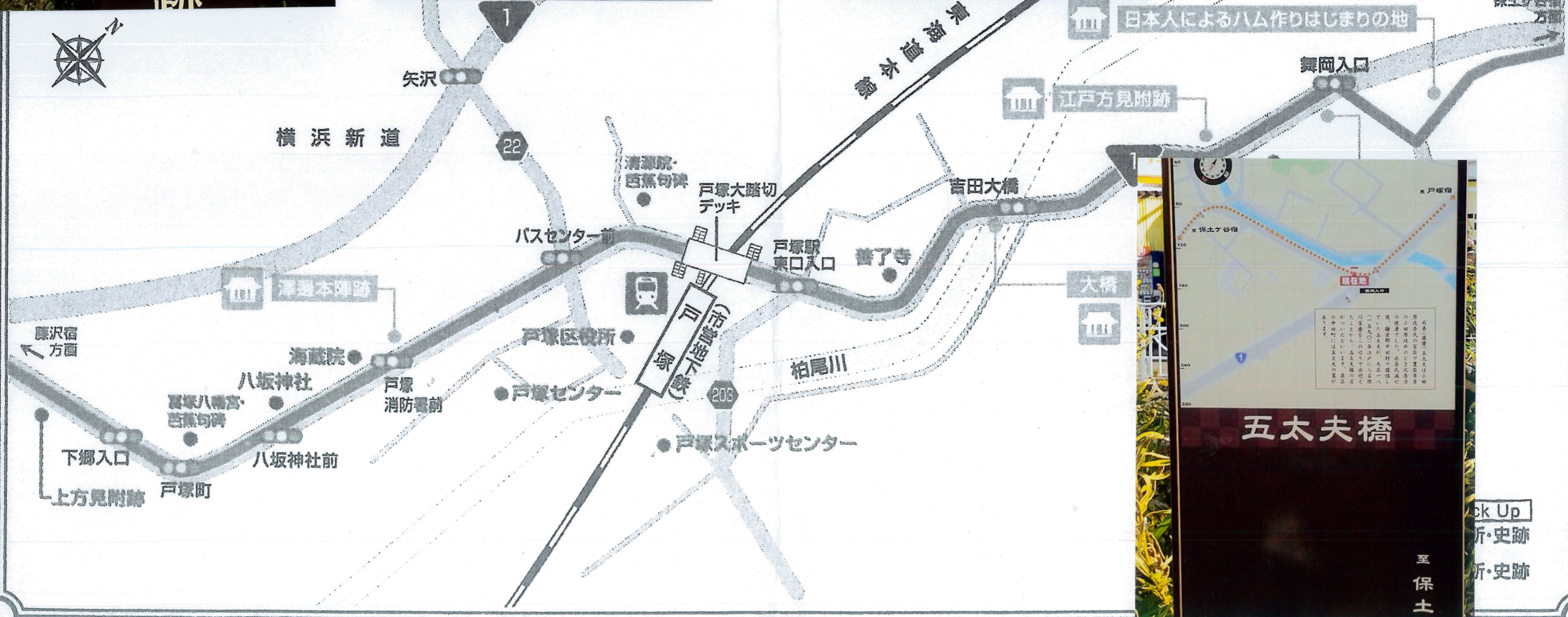
御所台の井戸 (政子の井戸)

この井戸は、徳川家康(徳川幕府)が、宿場町を築き、東海道を往來する道に古くより通商へ来る者として知られていました。この頃は、石籠坂(石名坂)といい、坂の上の辻に北向地蔵があります。

鎌倉時代、源頼朝の養子政子がここを遊びかかっていた時、この井戸の水を汲んで化粧に使ったと伝えられ、「御所台の井戸」と呼ばれています。

また、保土ヶ谷宿の河部本陣(保土ヶ谷二丁目)に江戸時代、徳川家康が、この御所水としてこの井戸の水を用いたと伝えられています。

(社)横浜田原観光協会
横浜市教育局文化財課
2024年3月





時宗総本山 遊行寺

清浄光寺が正式の寺名ですが、遊行上人の寺といふことから広く一般に遊行寺と呼ばれています。宗祖一遊上人は「南無阿弥陀仏」のおたよりをめぐら日本各地をまわり遊行して踊り念仏をおこなわれました。

この遊行寺は正中二年(一二三二)遊行四代春海上人によって開かれ「藤沢進場」といわれ時宗の総本山とよばれます。

宝物として、国宝「遊聖絵」重要文化財「時宗遊去絵」後醍醐天皇御像などを多数あります。

境内には、市指定天然記念物の銀杏の巨木、国指定史跡「藤沢敵御方供養塔」、県指定重要文化財の梵鐘、長生院にある小乗判官と照子姫の墓や有名な文字碑などもあります。

また桜ふじ、花しずくの名所で、観光百選の一つにもなっています。

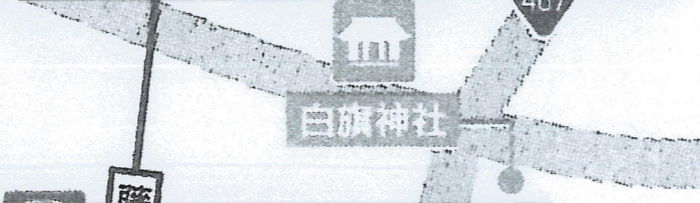


白旗神社

御祭神 寒川比古命 源義経公
配神 天照皇大神・大國主命・大山祇命
国扶捷命

由緒 古くは相模一の宮の寒川比古命の御分霊を祀り、寒川神社とよばれていたが、創立年代はわくわくはわからない。

鎌倉幕府によって記号された「吾妻鏡」によると、源義経は兄頼朝の勅諭を受け、文治五年(一一八九)四月二十日奥州・岩手県・平泉の女川館において自害された。その首は奥州より新田冠者高平を使いとして鎌倉に送られた。高平は、腰越の宿に着き、そこで相田義盛・梶原景時によって首実検が行われたという。伝承では、弁慶の首も同時にみられ、首実検がなされ、夜の間に二つの首は、此の神社に飛んできたという。このことを鎌倉(頼朝)に伝えたところ、白旗明神とて此の神社に祀るようになった。義経公を御祭神とし、のちに白旗神社とよばれるようになった。弁慶の首は八王子社として祀られた。



伝義経首洗井戸

源義経(鎌倉幕府の特任源頼朝の忠臣)は、新田に落ちた後、奥州平泉に逃げた。しかし、一一八九年(文治五年)春、頼朝の命で奥州平泉に侵入し、平泉の女川館において自害された。その首は奥州より新田冠者高平を使いとして鎌倉に送られた。高平は、腰越の宿に着き、そこで相田義盛・梶原景時によって首実検が行われたという。伝承では、弁慶の首も同時にみられ、首実検がなされ、夜の間に二つの首は、此の神社に飛んできたという。このことを鎌倉(頼朝)に伝えたところ、白旗明神とて此の神社に祀るようになった。義経公を御祭神とし、のちに白旗神社とよばれるようになった。弁慶の首は八王子社として祀られた。

Mitsunori Yoshinaka is a younger brother of Minamoto Yoritomo (Shogun of Kamakura Shogunate) who was killed from Takeda no Chiku (Takeda region), Kanto in 1189. Yoshinaka's head was sent to Kamakura (Shu city, later province). His head was thrown away and buried in the side of Kamakura (Kamakura city). Tradition says that the head of Yoshinaka was buried at the well after found by a village. This "Well" of Mitsunori was down by Utagawa Kunitomo.



藤沢敵御方供養塔

藤沢進場(大正五年)に建立された。この塔は、上野原の戦いで戦死した敵軍の供養のために建立された。塔の周囲には、戦死した敵軍の首実検が行われた場所を示す石碑がある。塔の建立は、藤沢進場の戦いで戦死した敵軍の供養を目的とした。塔の建立は、藤沢進場の戦いで戦死した敵軍の供養を目的とした。塔の建立は、藤沢進場の戦いで戦死した敵軍の供養を目的とした。



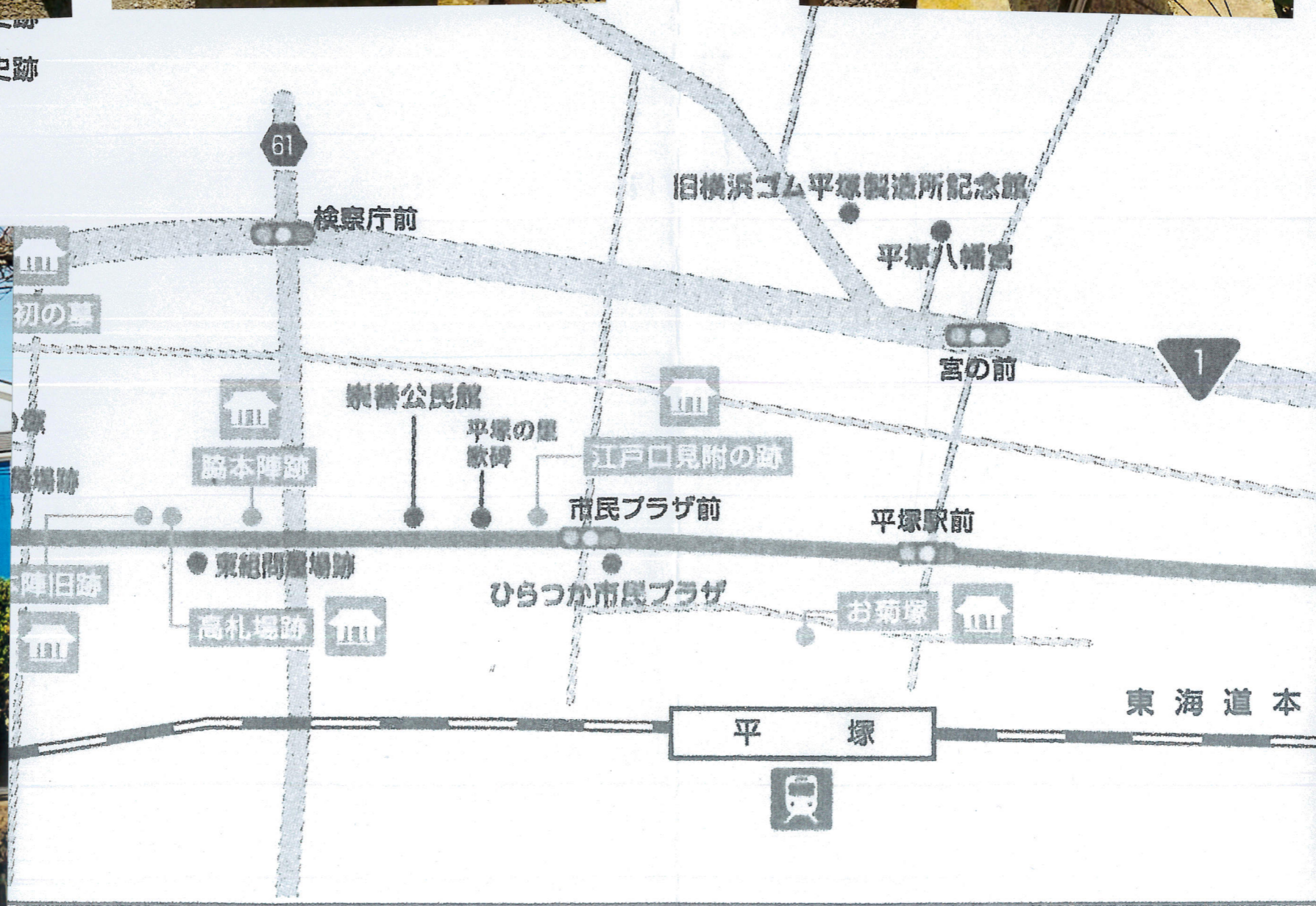
関次商店

藤沢今昔
お土産アート
販売 2018

旧東海道
鉄道駅
Pick Up
名所・史跡
名所・史跡



鉄道駅 ● 名所・史跡



平塚宿の江戸見附

平塚宿と加賀平塚宿との間には、かつて松並木があり、その松並木の西端に平塚江戸見附がありました。江戸見附は、江戸に入る人々を監視する役割の役目を持ちました。江戸見附の跡は、現在でも見ることが出来ます。江戸見附は、江戸に入る人々を監視する役割の役目を持ちました。江戸見附の跡は、現在でも見ることが出来ます。

平塚市

島崎藤村邸

藤村は、明治三年（一八七二年）二月十七日、群馬県第八大区五小区馬淵村（現在、木曾郡山口村神坂区馬淵）の本陣の家に生まれ、本名を春樹という。
昭和十六年（一九四一年）一月十四日大磯のドンドン館を見に来た珍しい郷土行事であるのよるこはれ、これを左義長と言いつ初められた。
大磯の温暖な地をこよなく愛し、その食、大磯町東小磯のこの地に生まれ、東方の門の争を起したのがあった。藤村は「草舟」「豆屋」などの詩集を刊行して日本近代詩史に不滅の名を刻み他に不明批評随筆、旅行児童文学など数多くを残している。昭和十八年（一九四三年）八月二十一日藤村大が、東方の門の座標を明瞭に中道偏を訴え急に倒れた。八月二十一日午前時三十五分、涼しい風だね」という言葉を残して本曾の生んだ大文豪は行年七十一才で永眠され、本人の希望により大磯地蔵寺に葬られた。



10

晴立庵

寛文四年（一六六四年）小田原の崇徳寺の地に五智如来像を運び、地蔵堂を作る目的で草庵を結んだ。結庵まりで、元禄八年（一六九五）老翁八の大匠三千庵が入庵し晴立庵と名づけ、第一世庵主となりました。現在では、京都の菩提寺・滋賀の無名庵とともに日本三大俳諧庵の一つといわれています。辛酉の草庵を結んだ時に晴立沢の標石を建てたが、その標石に「晴立庵」の文字と刻まれていることから、晴立庵の地として、注目を浴びています。

晴立庵 身にもあはれは 知られり
晴立庵 秋の夕暮れ



西柳



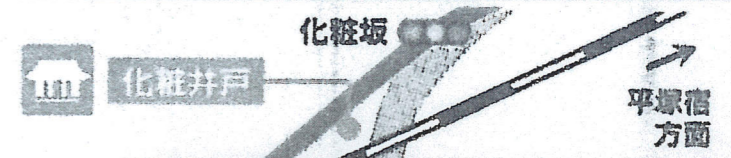
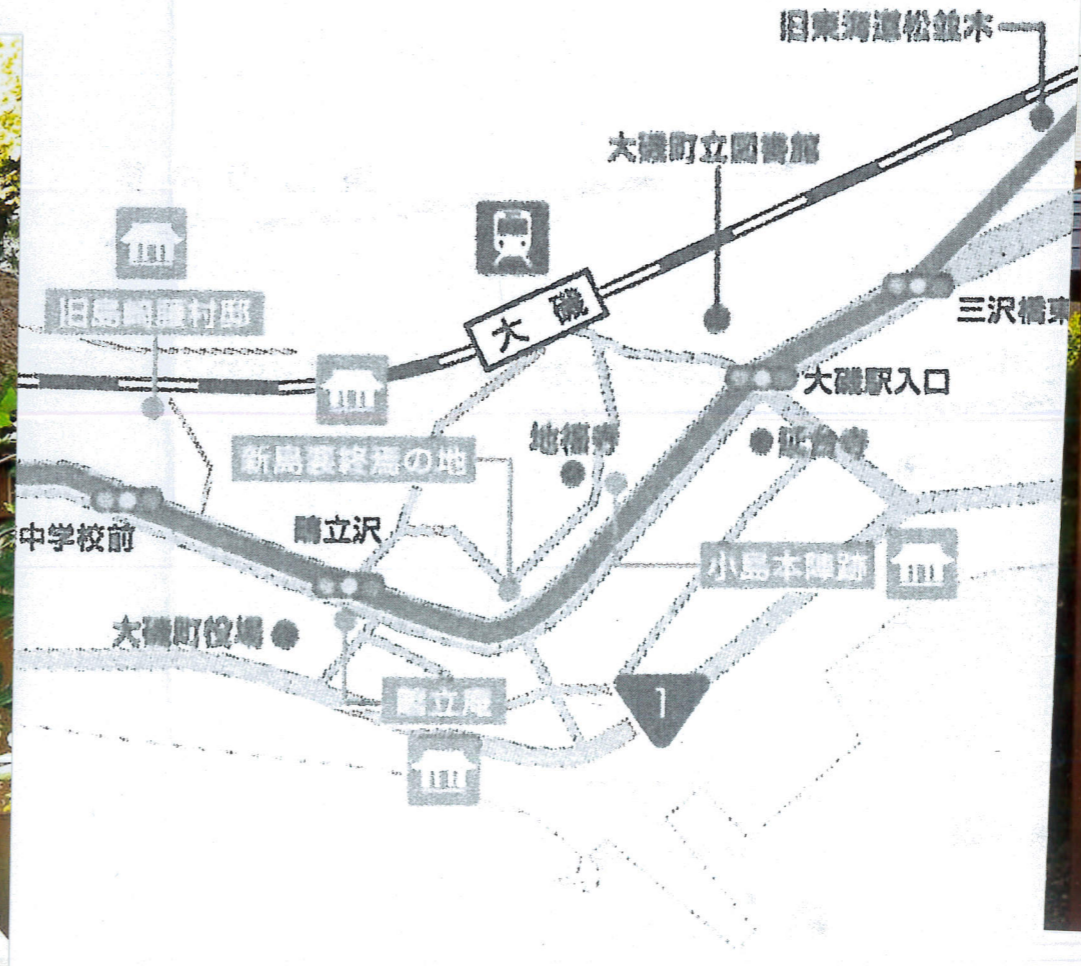
旧東海道

名所・史跡



鉄道駅

● 名所・史跡



化粧井戸

「化粧」については、高来神社との関係も考えられるが、伝説によると鎌倉時代の大磯の中心は化粧坂の付近にあった。当時の大磯の代表的な女性「虎御前」もこの近くに住み朝な夕なこの井戸水を汲んで化粧をしたのでこの名がついたといわれている。



50 100 150 200 250m



